

# 保育者養成校における地域連携に関する研究

～学生の学びと地域貢献に着目して～

Study on the Community Based Cooperation in the Training Childcare Professionals

— Focus on the Active Learning of the Students and the Possibility of the Regional Contribution —

柴田 卓*	伊藤 哲章*	早川 仁*	古川 督*
Suguru Shibata	Tetsuaki Ito	Hitoshi Hayakawa	Satoshi Furukawa
猪股 照子*	仲西真美子*	三瓶 令子*	
Teruko Inomata	Mamiko Nakanishi	Reiko Sampei	

The present study, the University early childhood education department is a nursery's training institution in the local junior college. In order to organize the content that is carried out in collaboration with the local community this paper investigates these various perspectives: intern cooperation training type, field-work & volunteer type, performance learning & outcomes type, retraining of the teachers – early childhood type and citizen seminar type, industry-university cooperation type. From these six perspectives we focus our research. As a result, each author systematically clarifies the role of regional cooperation and regional contributions as child-care and caregivers' training school. In addition, encountered challenges and prospects are reviewed in this study.

## 1. はじめに

幼児教育学科の学生にとって、免許・資格を得るためのカリキュラムは、実に多岐にわたり、それらはいわゆる「子育て」の域を超えた専門性の高い学問といえる。カリキュラムを縦糸とするならば、教育・保育実習は横糸のように織り込まれ構成されている。

本学では、1年次6月より附属幼稚園で1週間の教育実習が課せられ、次いで地域の幼稚園で1週間、そして地域の認可保育所で2週間の保育実習が義務付けられている。また2年次になると同じ幼稚園で2週間、施設で10日間、再度保育所または施設で10日間の実習が必要である。つまり、本学では文科省により義務付けられている教育実習の4週間を3分割し、1年次より実施しているのである。これにより、本学科の学生は、学内で一定期間学んだ後に実習に出かけ、また一定期間の学びの後に実習に出かけるということを繰り返すことができる。この

---

※ 幼児教育学科

ような授業と実習体験の繰り返しは、将来保育者を目指す学生にとっては理想的な学びのスタイルといえよう。しかし、近年の学生は、生活体験の欠如がみられ、このような理想的とも思われる学びのスタイルでさえ容易なことではない。例えば、保育内容の5領域を授業の中で別々に取り上げても、実習という実践の場では活かされにくいことがある。5領域は、子どもにとっては普段の生活の中で複雑に絡み合いながら展開されているため、学生の中で各領域が統合化されなければ保育そのものがつまずいてしまうのである。大場<sup>(1)</sup>の言うように一人の子どもを理解するためには、これら5つすべての領域の窓より子どもを観ていく必要がある。この点は、幼稚園の接続として位置付けられている小学校が「まず教科ありき」であることとの大きな違いであるといえる。学生が縦糸としての様々な教科を学内で学び、それを横糸としての学外実習で活かすためには、学生の中でカリキュラムの統合化が必要である。これは学内での授業だけでは理解し難く、フィールドで様々な子どもに関わる体験により、大きな効果を得ることができると考えられる。このような点を踏まえ、初めて文科省がフィールドでの学びの重要性を唱えたのは、2000年代初頭であった。それ以前もボランティア体験やインターシップ等、学外での体験・経験等は既に実施されていたが、カリキュラムの中でこれらのフィールドワークを位置付けたのは上記の時期であったと認識している。

本学科に於いても、この頃より学外からのさまざまな依頼を受けるようになり、それらはどちらかといえば学内で学生達が学んだ「表現的な内容」(紙芝居・オペレッタ・劇・ダンス等)を学外の子どもの前で実践して見せるという形態がほとんどであった。2000年代に入る以前より依頼を受けたのが、郡山市・福島民友新聞社共催の「ゴミゼロキャンペーン」であり、今日まで20年近く続いている。この内容は、上記「表現的な内容」を通して郡山市民へクリーンキャンペーンをするもので、教育的見地からいえば、学生自身の体験を通した学び、すなわち表現力や発表力、コミュニケーション力等の向上に大きく寄与してきたと感じている。しかし、これらはカリキュラム上での取り組みというよりは、各表現系の授業内容を応用した、時間外活動としての色彩の濃いものであった。その後、本学学長により2009年には郡山市の「ニコニコにこども館」(以下ニコ館)、翌2010年には本宮市の「えぼか」に於いて、それぞれ地域連携の協定書が取り交わされ、正式に本学と地域が連携した取り組みが実施可能となった。当初ニコ館では学生を小グループに分け、来場の子どもの関わりだけでなく、事務的な作業も含め全員が何らかの形で関わるという形態であった。しかし、この方法は学生の負担が大きく、現在では年2回「おたのしみコンサート」(ハンドベル演奏)と、「ニコ館まつり」のみの参加としている。また、えぼかは、「保育内容演習 表現と創造Ⅰ」の授業内取り組みとし、クラスごとに10月から4回伺い、地域の子どもの達に上記内容を披露したり、ゲーム等で遊んだりしている。この方法は完全に授業時数にカウントし(2コマ分)、あくまでも授業のフィールドワークとしてカリキュラム(シラバス)の中に入れている。このことにより学生は、授業

の延長としてフィールドに出向き、子どもとの関わりの中でそれまでの学びを確認することが可能となり、「表現と創造」の授業で求めている、客観性・応答性・コミュニケーション力・発声・動き等の向上にも繋がっていると感じる。

以上のように、本学科におけるフィールドワークは、これ迄は地域連携というより学生の学びの場としての色彩が強かったといえよう。しかし今後は地域と連携することで、学生が自ら課題を発見して解決することやそのために協働する力を育む機会を提供し、そのプロセスの中で成長を実感することが重要である。同時に新たな視点として、今後コミュニティ・プランナーとして地域活性化のためにもう一步踏み込んだアイデアの提供や企画等、新たに地域から求められる連携についても検討していく必要がある。そこで、本研究は、本学幼児教育学科が地域との連携として実施している内容を整理・可視化し、考察を加えながら保育者養成校における地域連携および地域貢献の在り方について明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

はじめに、保育者養成校における地域連携・地域貢献に関する他大学の取り組みを調査し、本研究の独自性を述べ、次に本学科の取り組みに関して事例をもとに考察を加える。

本研究において取り上げる事例は、地域との連携を通して学生の主体的かつ能動的な学びに関連する内容と教員がその研究成果等を通して地域に貢献する内容に大きく分けられる(表1)。さらに、その内容と特性から次の6つの項目に関して事例をもとに考察を加える。1) 実習連携型、2) フィールドワーク型、3) 学習成果発表型、4) 教員・園内研修型、5) 市民公開講座型、6) 産学連携型である。おわりに、考察に対する展望をまとめることとする。尚、本研究における地域連携とは、学外の市民・幼稚園・保育園・こども園・施設・団体・企業・市町村等と本学幼児教育学科との何らかの連携・協力関係にある場合を指している。

表1 本学科における地域連携と地域貢献の分類

<p>■地域との連携を通して学生の主体的かつ能動的な学びに関連する内容</p> <p>1) 実習連携型：①「実習の意義と実習先との連携」②「施設との連携」                  2) フィールドワーク型：①「えぼか」                  3) 学習成果発表型：①「もみじ会」②「劇とあそびのつどい」</p>
<p>■教員が地域に貢献する内容</p> <p>4) 教員・園内研修型：①「サマーリフレッシュプログラム」②「郡山市私立幼稚園協会との連携」                  ③「おのまちわかばたんけんたい」                  5) 市民公開講座型：①「わくわく子ども大学」                  6) 産学連携型：①「一般社団法人福島県医療福祉関連教育施設協議会 福島ネクストホープ研修会」</p>

### 3. 他大学の取り組み

①指田<sup>(2)</sup>によると、こども教育宝仙大学では開校以来、“地元”である東京都中野区をはじめとする地域社会との連携を強化し、充実・拡充を図っている。保育者養成機関である特色を活かしたきめの細かい協力体制を維持しながら、専門知識、技術、教育・研究成果を地域社会に還元し、中野区の目指す将来像の実現に積極的に協力している。「親子・保育者が共に育つ」という教育的視点に立った新たな子育て支援の在り方を探り、幼稚園・保育所等施設における教育力・保育力向上のため具体的プログラムの開発及び実施にあたるとしている。内容としては、生涯学習との連携、図書館おはなし会等への実習生受け入れ、保育園・幼稚園職員を対象とした研修会の実施である。

②新實<sup>(3)</sup>によると、愛知東邦大学では就業力育成教育プログラムの一環として「地域と連携した教育」を実践するとした。方法としては、保育者養成課程における造形表現関係科目の授業において、地域と連携した教育を取り入れ学生が保育実践力を主体的に学ぶことができるよう授業改善を行うというものである。学生が主体的に保育実践力を学ぶため、大学近隣の幼稚園と連携し幼児における造形表現活動の授業実践を行い、事後の学生自身の振り返り、現場からの意見・感想などアンケートを実施することで、学生自ら問題に気づき、課題を見つけ改善していく主体的な学びの機会を得たとしている。この結果より、地域と連携した教育を授業に取り入れることは授業改善効果があったと考えられると述べている。

③柏原<sup>(4)</sup>によると、大阪人間科学大学では開学以来、「遊び力」を通して地域に貢献できる4年制保育者養成に取り組み、学科全体で摂津市と子育て支援活動の連携を深めている。平成19年度現代GPにおいて「遊び力を育成する地域連携活動」が採択され改善を重ねながら今日に至っている。教員が学生と共にその活動に参画し、学生へのニーズや地域が求めている子育て支援のニーズ等を収集することに努め、また教員は積極的に地域連携活動に関する実行委員会に参画し、地域連携活動の主催者として摂津市の関係諸団体と共に活動に取り組むよう努めている。学科で取り組む活動はボランティアとは区分し「地域連携活動」として学科教員内で共通理解を図っており、本来学生が地域に出向いて行う地域連携活動の他に、学生が地域の子どもたちや保護者を招待し学生が主体となり運営する取り組みも行っていることを述べている。

これらの先行研究からも、単独の授業や事業における地域との連携に関する研究は行われているが、学科として地域連携および地域貢献を整理・可視化し体系的に捉えて検討した研究は少ない。これからの保育者養成校の在り方を検討するという意味において、本研究は意義のある研究といえる。そこで、本学科における地域連携・地域貢献の事例を取り上げる前に、本学科がカリキュラムの中心に据える実習に焦点を当て、その重要性和地域との連携について取り

上げることとする。

#### 4. 本学科の取り組み

##### 1) 実習連携型

###### ① 実習と地域連携

本学の幼児教育学科では、実習指導を充実するために「福島県保育者養成校連絡会」の作成した保育実習の手引き<sup>(5)</sup>を一助として学生への理解を図っている。また、冊子を保育所・施設へ配布することにより尚一層の実習施設との連携を図っている。幼稚園実習においては、この冊子をもとに実情に合った冊子を毎年見直し、実習先に配布している。福島県の保育者養成校連絡会は保育者養成の向上を目指しており年に数回、会議や研究会を設けており担当者同士の連携も深めている。

教育・保育実習には、観察実習・参加実習・部分実習・総合実習があり、その中で子どもの理解・クラスの理解・子どもへの関わりの理解・指導計画の作成と授業で学んだ事の実践の日々である。

地域の実習施設と実習担当教員をはじめとした学科のすべての教員が連携しながら学生を支え、実習を乗り越えることで、希望を持って保育者となっていくことを目標としている。そのため、実習事前・事後指導においては、学生の個々に合った指導を日誌及び計画も含めて実情に沿いながら進めていくことが重要になってくる。実習担当者も含め、教科担当教員やクラスのアドバイザーも不安や悩みを緩和できるよう学生に寄り添いながら支援を行っている。また、幼児教育学科の教員が巡回指導に出かけた際には、学生の実習の在り方や日誌・計画の記入方法、事前準備等について丁寧に細やかに話し合いを持っている。また、学生とも健康状態や実習の内容等について面談を行っている。

しかし、実習事前事後指導を通して学生の活字離れが多く見受けられ、文章の表現力、漢字の読み書き等が不得手の学生が多いため、日誌の記入や指導計画案の立て方などは、反省や課題から考察し、全体的かつ個別に指導を繰り返す必要がある。また、保育現場に長く勤務した経験から、学生がスムーズに実習に臨むことができるよう、現場で培った実践的な保育技術も取り入れて体験の積み重ねを行っている。さらに、様々なフィールドワークに参加することで、実体験として保育を総合的に理解することができ、その体験が次の実習に活かされていくのである。従って、本学の学生は各教科・実習指導・フィールドワーク・実習・学習成果発表会が一連の流れを持ち、学びの連続性によって保育における実践力を高めているといえる。

###### ② 「施設との連携」オランサまつりへの参加

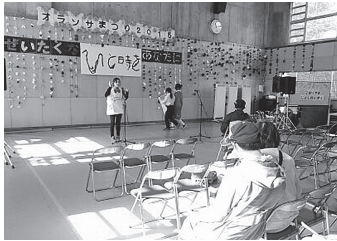
ここでは、施設実習先との連携について、その事例報告及び考察を加える。2015年10月25

日(日)、社会福祉法人安積愛育園の障害者支援施設あさかあすなろ荘主催の秋の行事に学生19名がステージアクトのボランティアとして参加し、教員2名が視察を行った。

障害者支援施設あさかあすなろ荘の概要は、創設が平成9年4月であり、実施事業は生活介護、施設入所支援、短期入所、日中一時支援である。定員は日中40名、夜間40名である。障害者支援施設あさかあすなろ荘「オランサまつり」の実施目的は、「地域の皆様にあさかあすなろ荘を知っていただき、障がいを持つ方への理解を広げるためです。お祭りはあさかあすなろ荘の明るさ・音楽・アートなどの特色を生かした内容を中心に、障がいのあるなしに関わらず、お子さんから大人の方まで参加された皆様が楽しんで、かつ地域の皆様との交流ができることを前提に企画しています」(あさかあすなろ荘からいただいた文書による)とのことである。本学幼児教育学科の参加目的は以下の3点である。①学生の学外でのボランティア体験を通して学修の深化。②施設実習前の1年生を参加させ、障がいを持った方々との交流と知的障がい者への理解を促すことおよび支援者(施設職員)の支援方法を学ぶこと。③例年、保育(施設)実習生を受け入れていただいている施設との良好な関係をより深め、継続した関係を維持発展させることである。実施内容はペープサート、オペレッタ、幼児体操である。ステージアクトはあさかあすなろ荘の体育館で行われた。観客はあさかあすなろ荘の入所者さんや利用者さん、その家族の方々、幼稚園児、地域の方々であり、自由に出入りできる環境であった。本学の学生の発表の時には幼稚園の子ども達が楽しそうに見ていた。観客参加型の幼児体操の発表の時にはあさかあすなろ荘の入所者さん・利用者さんも参加して、会場全体が大いに盛り上がった。

本学幼児教育学科の他に地域の幼稚園の演奏とダンスやフラダンスサークル、同法人の他事業所の利用者による演奏などが行われた。ステージの他に入所者・利用者や職員の方々だけでなく、地域の方々や商工会青年部なども参加して模擬店やバザーが20ブース近く出店していた。また、本学のOGが職員として働いており、学生が将来の自らの姿を具体的に想像するという意味でも、意義のある活動となった。発表した学生たちからは、「緊張していたが、会場が盛り上がり良い経験になった」、「障がいを持っている方が勢いよくステージ近くまで来たとき、少しびっくりしましたが楽しく踊って下さったので私も楽しい気持ちになりました」などの感想を聞くことができた。「施設で生活する障がいを持つ人々のことを地域の方々と交流することで理解してもらうこと」を目的とする行事に、幼児教育学科の学生がボランティアとして参加することで、地域の障害者支援施設の理解を深めることができた。施設が行事を通して地域に理解を示すためにさまざまな企画をし、そこのスタッフが取り組む姿を見て、「地域との交流」や「地域への貢献」を実際の現場で学んだことには大きな意義があったといえる。また、不特定多数の方々に学生たちが学んできたことを発表したことで成果と課題が明らかになり、それ以降の授業への取り組みに積極的な姿勢で臨む機会ともなっている。

本事例は、授業連携・フィールドワーク型で取り上げることもできたが、実習先との良好な



写真① ペープサート



写真② オペレッタ



写真③ 幼児体操

関係を築くことにより発展的に実施・継続している活動であることから、実習連携型として位置づけた。次の項目では、フィールドワークとしての授業における地域連携について、事例の報告と考察を加える。

## 2) フィールドワーク型

### ① 「えぼか」本宮市民いきいき応援プラザでの活動

#### 1. 活動の経緯

「えぼか」本宮市民元気いきいき応援プラザは、地域市民に親しまれ、健康増進機能、子育て支援機能、多世代交流機能の3つの機能の連携融和を目的とした活動施設である。本学は平成21年度より地域貢献活動として本宮市とこの事業の一部提携を結び、特に本学科においては子育て支援事業の一翼を担ってきた。本学科は幼稚園教諭及び保育士養成を主な目的としていることから、主体的学びの場と地域貢献に繋げる機会が出来、本宮市と互恵関係が得られることで進んでこれに参加してきた。

#### 2. 活動の意義

保育学を学ぶ学生にとって、身に付けた表現力を繰り返し実践の中で試しながら、知識・技能を段階的に磨き、一方で社会貢献に繋げる意識を持つためにも、フィールドワークは大きな学習成果を上げてくれる。また、市民の方々と交流を持ち、感謝の言葉や親しみの表情に出会うことで、自分たちが活かされていることを実感できる場となる。

#### 3. 学生指導形態の経緯

「えぼか」への参加初年度は授業外ボランティア活動として放課後に活動練習を行ってきた。指導教員は1名で、多岐にわたる発表内容の練習指導・活動事務等、業務負担が大きな課題となっていた。学生側も授業外練習が多く負担となっており、メンバー全員揃っての練習・連絡等が難しく、充実した発表内容に繋がりにくい面も見られた。それらの反省をもとに、次年度よりフィールドワークを学びの場として活かすことをねらいとして、授業の中に組み込むことにした。受講対象学生は1年生である。この授業はチームティーチング形式で表現系(音楽・美術・言語)3名の教員が担当することで、表現指導内容に幅と深みを持たせることができ、

業務の負担軽減も相成って丁寧な指導が可能となった。学生側は練習時間や活動場所が確保され単位修得・評価にも繋がることから、発表内容もより充実したものになって来ている。

#### 4. 授業内容

授業時数は1クラス6コマで、その内訳は以下の通りである。

- 1 コマ目－活動意義と概要説明・チーム編成・発表内容の検討～決定～練習。
- 2 コマ目－発表練習と大小道具制作その他諸準備。
- 3 コマ目－発表リハーサル。
- 4 コマ目・5 コマ目－「えぼか」活動参加。
- 6 コマ目－活動の振り返り反省。

活動後は学生が各々表現力向上の目標・課題意識を持てるように、発表現場では毎回ビデオ撮影を行っている。その後の授業でこれを再生し、自己の表現を客観的に顧みつつ、その場では気付かなかったことの確認や、授業担当教員によるアドバイスの時間を設けている。発表内容は、舞台演技(オペレッタ・リズム劇・人形劇)、幼児体操、絵本読み聞かせ、ゲーム遊び、手遊び、制作遊びなどである。10月初旬に行われる「もみじ会」(学習成果発表会・チャイルドシアター)での実践と学びの場を重ね合わせ、ここで表現発表を選んだグループは、それをベースとして更に授業の中で表現力を磨いていくように重層的学びの構造としているのである。

#### 5. 活動アンケート結果

2015年度は、「えぼか」活動を含めたフィールドワークの成果と課題点を確認するため、質問紙による学生アンケート調査を実施した。ここで一部を抜粋して記す。

・質問1. 参加は、授業で学習したことが役に立ちましたか？

回答1. 強くそう思う＋そう思う＝96.6%

・質問2. 具体的にどんなことが役に立ちましたか？

回答2. 幼児の発達理解と具体的な対応力・表現技術スキルアップ・人前に立つ行動力など。

・質問3. このような機会は、将来の職場で活かせると思いますか？

回答3. 強くそう思う＋そう思う＝95.7%

#### 6. 成果と課題点

- ・発表演目は多岐にわたる表現活動で、グループ数も多いことから、参加グループを取りまとめる全体リーダーの育成や、指導担当教員の増員が課題として挙げられる。
- ・学修目標・課題認識については、保育を志す者としてこれに参加することが社会貢献、自身の成長に大いに繋がるものであることを自覚し、積極的に準備・練習・打ち合わせに取り組んできている姿が見られる。また、活動の手応えと喜びも味わうことが出来ている。



- ・グループ活動に関することでは、一体となつての練習に難しい側面が窺える。活動グループ編成時、グループ内の対人関係が上手く構築できないケース、練習時間がアルバイトや帰宅交通機関の都合上充分取れないケース、メンバーの活動意欲の温度差が大きいケースが主な要因となっている。
- ・2年生は実習・就活・卒業研究と重なり、参加が難しいことから、1年生主体の参加となっている。しかし、参加内容の充実を図るためには2年生の参加が望ましい。現場への参加は無くても経験者として1年生への指導を促すことで成果を上げることができる。さらに縦の関係性を充実させ、就活アドバイスや人間関係構築等にも良い影響をもたらすと考えられる。現在、学習成果発表会の「もみじ会」や「劇とあそびのつどい」で舞台表現系学生を中心に、それらをねらいとした活動を展開しているが、更に踏み込んだ縦割りの指導構造の構築が望ましい。

次に、これらの学びを活かす学習成果発表会として本学が実施している「もみじ会」、学科として実施している「劇とあそびのつどい」の事例を取り上げる。

### 3) 学習成果発表型

#### ① 「郡山開成学園もみじ会」

本学園創設以来毎年開催される「もみじ会」は、1963年から学園最大の行事となり今日に至っている。このもみじ会は他校で行われている文化祭・学園祭と性質を異にしており、「日頃の教育・学習成果」を学内及び地域社会へ発表する機会として実施しているものである。本学科としての発表内容は「みる・きく」「つくる・あそぶ」「かながえる」の3パートに分け、2年生は卒業研究単位、1年生は2年生の発表内容を参考に自分が参加したいパートに希望を出し実施する。1・2年生がコミュニケーションを図り、一致協力できる形態のものとし、2年生は卒業研究の中間発表として位置づけ、1年生は2年生の研究発表を手伝いながら上級生の研究内容・態度に触れ、次年度の卒業研究選択に結び付けていくことを目的としている。「みる・きく」パートは、オペレッタ・リズム劇・幼児体操・人形劇等の「舞台表現系」、「つくる・あそぶ」パートは、造形あそび・科学あそび・運動あそびの「表現活動系」、「かながえる」パートは、コラージュ制作・保育原理・保育相談等の「理論系」の内容で構成され、授業として開講されている各科目の学習成果の発表の場としている。

もみじ会には大学生だけでなく、附属機関である高校生・幼稚園児をはじめ、県内外の小さい子どもからお年寄りの方まで幅広い年代の方々に来場いただき楽しんでいただいている。

#### ② 「劇とあそびのつどい」

劇とあそびのつどいは、学生の創作表現活動の発表と、地域社会への貢献を目的として「第一回劇とあそびのつどい」が、1984(昭和59)年に実施された。以来継続され、2015(平成27)

年で32回を迎えた。建学記念講堂を会場として、舞台発表は2年生の表現系卒業研究の作品発表とし、その外展示ロビーでは、あそびのコーナーを設け、来場の子ども達にさまざまなあそびを体験させ、またハンドベルによる歓迎の演奏も継続して実施している。舞台発表は、1997(平成9)年よりフィナーレで、学生自身の作詞作曲による「つどい賛歌」を全学生で歌って来場者をお見送りする形態となり、またオープニングは、2004(平成16)年の20周年記念の会より、故名誉学園長関口富左先生作詞による「こんにちは こんにちは」をファンファーレ付きの歓迎の歌として演奏する形態となり、今日に至っている。

この10年間で特筆すべきことは、2006(平成18)年は、祝・郡山開成学園創立60周年の会となり、卒業研究のパネルをロビーに展示をすることとし、2010(平成22)年まで継続した。また2013(平成25)年は、「つどい30周年記念」の会となり、附属幼稚園園児も舞台で歌を披露することとなり、以来継続している。学生達が自身で企画・運営し、2年生が1年生を指導するという体制も出来、建学記念講堂での音響・照明・綱元等の豊富な設備や装置を活用し、演出や表現方法も年々工夫されている。来場者も天候により増減はあるものの、毎年一定数の子どもと保護者が来場し、行事が地域に定着した様子が窺える。

#### 4) 教員・園内研修型

##### ①「サマーリフレッシュプログラム」

平成19年6月の改正教育職員免許法の成立により、平成21年4月1日より教員免許更新制が導入された。文部科学省は、更新講習の受講対象者を平成25年に拡大し次の通り定めた。(1) 現職教員(2) 実習助手、寄宿舎指導員、学校栄養職員、養護職員(3) 教員採用内定者(4) 教育委員会や学校法人などが作成した臨時任用(または非常勤)教員リストに登載されている者(5) 過去に教員として勤務した経験のある者(6) 認定こども園で勤務する保育士(7) 認可保育所で勤務する保育士(8) 幼稚園を設置している者が設置する認可外保育施設で勤務する保育士など。よって、保育士には受講義務はないが、認定こども園や認可保育所で勤務する保育士は受講の対象となる。教員免許を持つ者は10年に一度更新講習を受ける必要があるため、県内でも多くの教員がこの研修を受けなければいけない。本学では、平成21年の制度が開始された年よりサマーリフレッシュプログラム(教員免許更新講習)を開講しており、今年で8回目の開講となった。参加者数は公表していないため具体的な人数は明らかでないが、著者が担当した幼児教育に関する講座の参加者数(選択領域のみ)は、平成27年度は162名、平成28年度は123名であった。本学の位置する郡山市は交通の便が良いため、県中地区に勤務する教員はもとより、県内外の教員がサマーリフレッシュプログラムに参加している。

平成27年度、平成28年度の本学科のサマーリフレッシュプログラムに参加した教員の地区別

表2 サマーリフレッシュプログラム受講生 地区別内訳(選択領域・幼稚園教諭対象)

	平成27年度	平成28年度	合計
県中地区	68	44	112
会津地区	38	25	63
県南地区	24	28	52
県北地区	17	24	41
いわき地区	8	0	8
相双地区	4	1	5
県 外	3	1	4
合 計	162	123	285

内訳は、表2の通りである。県中地区、県南地区が多いのは当然であるが、予想以上に会津地区の受講生が多いことが判明した。受講生の中には本学の卒業生も多く含まれているが、具体的な人数は調査を行っていないので不明である。サマーリフレッシュプログラムでは本学独自のアンケートを受講生対象に講習修了後に実施している。アンケートの内容は5段階の評価(A:非常によかった、B:よかった、C:どちらとも言えない、D:悪かった、E:非常に悪かった)と自由記述である。担当教員は、このアンケートの結果を十分に分析し、翌年度の講座の内容を検討している。また、受講生より講習前に講座に対する質問事項や要望などを受け付けており、講師はその内容を反映させた講習に努めている。よって、近年ではほとんどの講座で良好な評価を得ているが、詳細は教務部で公表しているアンケート結果を参照されたい。今年度のサマーリフレッシュプログラム終了後の保育所実習の巡回指導で、本学の更新講習を受講した2名の保育士より偶然にお話を聞く機会があった。その時の内容を下記に記す。

- ・ 保育現場で役に立つ内容については実践してみたい。
- ・ 5日間も子ども達の様子が分からないのは不安なので、土日が含まれていて良かった。勤務先の所長からも助かると言われた。
- ・ 座学だけと諦めていたが、実習の授業も比較的多くて良かった。
- ・ しばらくぶりに研修らしい研修を受けて、リフレッシュすることができた。
- ・ 自分たちの保育所の教員研修に来てほしい。
- ・ ネイチャーゲーム(私は誰でしょう?)を実践してみたら、子ども達がとても喜んでくれた。

保育現場において教員研修のための時間を設けることは難しいという話をよく耳にする。これを改善するためには、行政が主導的な立場をとって積極的に教員研修を企画し、本学科のような教員養成に籍を置く人材を有効に活用できるシステムの構築が必要であろう。わが国の小学校では教材研究や授業研究が盛んに行われており、この研究手法は海外の教育関係者も注目

されている。しかし、現状では幼稚園・保育所でそのような授業研究はあまり実施されていない。例えば、上の保育士からのコメントにあるように学外における教員研修で、本学科の教員が講師を務めることも地域貢献の一つにあげることができるのではないだろうか。

## ②「郡山市私立幼稚園協会との連携」

ここでは、郡山市の私立幼稚園が加盟する郡山市私立幼稚園協会との連携について取り上げる。郡山市私立幼稚園協会は、会員相互が協力して幼稚園の発展と幼児教育の振興を図ることを目的とし、次の事業を行っている団体である。

- ・ 郡山市私立幼稚園協会 幼児教育の調査研究に関すること
- ・ 幼稚園経営に関すること
- ・ 各幼稚園ならびに関係機関との連絡協調に関すること
- ・ 教職員の資質の向上に関すること
- ・ 会員相互の教養親睦に関すること
- ・ その他本会の目的に必要な事項

この郡山市私立幼稚園協会と本学科との連携は歴史も深く多岐にわたるが、ここで取り上げるのは、郡山市私立幼稚園協会が主催する年数回の教職員研修に本学科の教員を派遣している点である。研修を通して、本学科の教員が日頃の研究成果を地域に貢献できる機会であると同時に、現場における先生方の生の声や課題等を伺える貴重な機会である。例えば、文部科学省は幼児期運動指針ガイドブック<sup>(6)</sup>で幼児期の運動を具体的に推奨しており、これらの実態について研修に参加した保育者から生の声を聞くことができる。こうした現場の声を踏まえ、地域の現状に沿った内容を授業に取り入れれたり改善に繋げたりできるという点においては、学生の学びに活かすこともできるのである。さらに、こうした連携やネットワークを通して新たな連携を構築していくことも重要であろう。

## ③「おのまちわかばたんけんたい」

ここでは、福島県小野町にある小野わかば幼稚園における本学との連携について、事例をもとに紹介および考察を加える。経緯は、本学が開催する免許更新講習サマーリフレッシュプログラムに参加した教諭から依頼を受け、小野町から正式に講師派遣依頼が届き実施が決定した。

小野町の自然環境を最大限に活用し自然の持つ教育力を活かすこと、歴史的遺産を活用し小野町の素晴らしさを体験しながら理解するという目標を掲げ、「おのまちわかばたんけんたい」という名前に決定した。活動内容とスケジュールは表3の通りである。ここでは第2回と第3回の内容を報告する。第2回は緑とのふれあいの森公園で実施した。はじめに、「自分のことは自分でやるべし」・「自分のからだは、自分で守るべし！」という探検の心得を確認。スズメバチ・マムシ等の写真を見せながら自分の身体を守る方法を伝えた。次に『じかき虫のぶん』という絵本を読み聞かせながら(写真④)、「たんけんビンゴ」について説明した。説明を終え

表3：活動内容とスケジュール

回	日程	活動予定場所	活動内容
第1回	5月17日	幼稚園園庭	自然遊び(ネイチャーゲーム等)、探検隊の説明
第2回	6月21日	緑とのふれあいの森公園	自然散策「宝ものさがし・植物編」
第3回	7月12日	夏井川河川敷	自然散策「宝ものさがし・昆虫・生き物編」
第4回	9月6日	緑とのふれあいの森公園	探検トレッキング「歴史・絶景探検」
第5回	10月18日	諏訪・小峯遊歩道	探検トレッキング「歴史・絶景探検」
第6回	11月1日	緑とのふれあいの森公園	秋の味覚と焚火を楽しもう！
第7回	1月24日	運動公園又は幼稚園	ダイナミック雪遊び

てまもなく、自然探索がはじまり、カエルを探していた子ども達が池の周辺に集まり、ひとり、またひとりと靴とズボンが濡れていき、「カエルに食べられちゃうところだった」と言っていた子どもの言葉が印象的であった。ビンゴを終え、お弁当を食べはじめた頃、トイレから戻ってきた男の子が「ぶんの葉っぱ」を見つけ、みんなに見せてくれた。その後も幼稚園の園庭や家庭で「ぶんの葉っぱ探し」が行われ、自然を通した学びが継続されているとの報告を受けた。その日のカンファレンスでは、改めて子どもの感性の素晴らしさに気づく良い経験だったと振り返ることができた。第3回は、地元にある千本桜として有名な夏井川の河川敷で実施した。前後半に分かれ、ライフジャケットを着ての沢のぼり(写真⑥)と陸での生き物探索(写真⑦)に分かれた。生き物組は人工物を発見する遊びの後、自由に探索を開始しカタツムリ、カエル、トンボ、ナナフシ、チョウチョウとたくさんの生き物に触れることができた。沢のぼりは100メートルほど上流に向かって歩き、初めての川と流れに必死な様子であったが笑顔も見られた。目的地に到着すると、大冒険をやりきった自信に満ちた表情に変わり、その日のカンファレンスにおいても普段見ることのできないたくましさ気づくことができたと振り返ることができた。



写真④絵本読み聞かせ 写真⑤池を覗く子ども達 写真⑥沢のぼりの様子 写真⑦捕まえたカエル他

これらの活動を通して、子ども達に自然体験活動の機会を提供し、自然との繋がりや五感を活用して遊ぶ楽しさを伝えることは重要なことである。同時に、現場の保育者が自然体験活動を実体験しながらリスクマネジメントやコース設定、導入や楽しみ方をはじめとした方法論を

理解するという意味でも、非常に意義のある活動といえる。「子どもの頃からよく知っていたが、このようにコースを設定すれば良いのか」という声をカンファレンスで聞くことができ、地域の自然環境や歴史遺産を教育資源として活用した事例ともいえる。従って、この取り組みは幼児と野外教育の実践を通した園内研修と捉えることもでき、実施後のカンファレンスを通して、本学の教員が課題を持ち帰って検討を加え、新たな知見で研究を加速させることができれば、理想的な地域との連携と捉えることができる。

## 5) 市民公開講座型

### ①「わくわく子ども大学in郡山女子短大」

平成28年8月7日(日)に「わくわく子ども大学in郡山女子短大」が本学で開催された。このイベントは地域貢献と郡山女子短大のPRを目的に行われ、県内より162名(小学生向け体験ブース148名、保護者向けブース14名)が参加した。当日は、はじめに講堂小ホールでオープニングセレモニーが行われ、イベントに参加した本学短大の教員が紹介された。小学生は保護者同伴で来学している場合が多く、講堂小ホールには300名ほどの小学生と保護者が集まった。その後、11の体験ブースに分かれて、子どもたちと一緒に活動した。幼児教育学科の子ども向けブースおよび担当教員は、「君は女子大生から逃げられるか!競・歩・中」(一柳・柴田)、「リズムであそぼ!」(三瓶・小林みゆき)、「たのしいりかじっけん!」(伊藤・バーナミィ)、「変身するからだのかたち」(早川・仲西)で、保護者向けブースとして、「イライラしないしつけのヒント」(古川・齋藤)も同時開催され家庭での適切な子育て方法についてアクティブラーニング形式で学んだ。

わくわく子ども大学は、短大の各学科より集まった実行委員の先生方を中心に平成28年5月より準備を進めてきた。初めての試みで何もかもゼロからスタートであったが、短大の各学科の力を結集して開催することができた。また、当日は、幼児教育学科の学生21名(1年生19名、2年生2名)がボランティアとして参加した。参加した学生は、お揃いの赤色のTシャツを着て、受付・案内誘導・ブースの補助などの仕事を明るく元気に担当した。参加した学生の感想は次頁の通りである。紙幅の関係でその一部を掲載する。今回のわくわく子ども大学の取り組みが、学生にとって主体的な学びや課題解決型の学びとして意義のある内容となりえたかという点、学生の感想を読む限り十分に意義のある内容であったといえる。また、参加した保護者からは、「貴重な経験をさせていただきありがとうございます」という感謝のメールもいただいた。更に、参加した教員からのアンケートでは本学を地域社会にアピールできたという意見が多数みられた。

よって、わくわく子ども大学は一定の成果を収め、学生の学びに繋がると共に、目的であった地域貢献及び郡山女子短大の特色をPRすることができたといえる。ただし、教員のアン

(たのしいりかじっけん！)

- ・当初不安もありましたが、前日に予備実験をしたおかげで当日はスムーズに教えられた。担当した3人の小学生の実験が成功し、嬉しそうにしているこちらまで嬉しくなった。
- ・実験が成功するか不安に思っていたが、私の説明で子ども達の実験が成功し、「分かりやすかった」と言ってくれて教えて良かったと思った。
- ・私が担当したのは、小学1年生の男の子二人だった。お互い初めて同士で最初は会話もしていなかったが、三人で楽しく会話をしながら実験をしているうちに男の子同士で会話をしている嬉しい気持ちになった。

(君は女子大生から逃げられるか！)

- ・保育者になるにはまだまだ未熟で、年代の違う小学生はとても難しかった。競歩中に全力で取り組み、楽しそうにしている子どもの姿を見られたので大成功だったと思う。私自身もとても楽しかった。
- ・初対面でチームを作り、作戦を練って逃げて、捕まった仲間と力を合わせて助けようとする姿にとっても感動した。小学生の子どもたちと触れ合い、楽しむことはなかなか出来ないのもとても良い経験になった。

(リズムであそぼ！)

- ・小学1年生は幼稚園生と違って、先生の動きを自分の目で見て、音を聞いてきちんと反応できるので感心した。
- ・幼稚園生でも聞こうとする姿勢を身につけさせることは大事なので、将来そのことを指導できる保育者になりたいと思った。

ケートでは、開催時期、スタッフの人員配置、日程、予算等の問題点も挙げられている。今回のアンケート結果を実行委員会で十分に検討し、次回開催に繋げていければと思う。

## 6)産学連携型

### ①「一般社団法人福島県医療福祉関連教育施設協議会 福島ネクストホープ研修会」

上記の研修会(7月9日、8月9～10日)に本学幼児教育学科2年生の2名が参加した。研修会の目的は、一般社団法人福島県医療福祉関連教育施設協議会の目的である福島県の医療福祉関連教育機関が連携・相互協力することにより、各職種者が医療の高度化に対応しつつ各々の専門性を理解し、強調して職務を遂行するチーム医療を実践し、もって全人的医療と良質なサービスの提供のために行動できる医療・福祉従事者を育成・輩出することを目的として、次の事業を行う。

1. 教育情報の共有・交換と各学校施設相互の連絡調整
2. 医療・福祉を担う人材の発掘・確保、地域定着のための対策、研究、協議
3. 医療・福祉に関する教育内容についての研究
4. 医療・福祉教育に係る行政機関との連携
5. 学生が医療・福祉従事者として活躍できる教育内容の開発と実施
6. その他本会の目的達成に必要な事項

の主に1・2・3・5に沿った内容の研修に医療・福祉関連教育施設の学生が参加し成果を上げることである。研修会の概要は下記の通りである。第1回研修会は、2016年7月9日(土)にポラリス看護学院(福島県郡山市)で実施され、参加者は18名(8校、10学科、男性0名/女性18名)であった。目的は、①各教育施設から参加している学生がお互いの顔を覚えて仲間づくりができる。②参加学生の所属する教育施設(教育内容)の特徴を理解することである。主な内容は、「病院から在宅へ 退院調整について」というテーマの講義、グループワーク(専門分野が均等に分かれるようにグループに分かれ自分の分野の説明と他の分野の理解を進めるためのディスカッション等)である。第2回研修会は、2016年8月9日(火)～10日(水)にポラリス看護学院で実施され、参加者は21名(8校、11学科、男性4名/女性17名)であった。目的は、①自分たちが働く場所を知る。②自分たちの職種に何ができるか、ポジティブな視点で自分たちのできることをを見つけることである。1日目の主な内容は、職場見学①「ヘリポート・救急外来・ICU・小児科病棟」(写真⑧)、職場見学②「4グループに分かれ他職種カンファレンス、認知症カフェ、脳神経外科ベッドサイドリハビリ、血管造影室の見学」(写真⑨)、グループワーク①「午前中の職場見学をグループごとに発表」(写真⑩)、講義「救急病棟の現状と役割」、交流会「夕食づくりを通し、仲間との交流を図る」、職場見学③「夜間救急指定日の救急病棟の見学」(写真⑪)、宿泊「星総合病院」である。2日目の主な内容は、講義「緩和ケア病棟におけるチーム医療実践例」、研修のまとめ、「講評・修了書授与・アンケート記入」であり、充実した研修内容であった。本学科の学生にとって「医療福祉」は、保育士資格の中の必修科目で学ぶが、職業として選択する幅は他の参加学生よりも狭いものであり、研修を通して医療福祉分野の広さと深さを経験したことは、社会に出てからさまざまな生活場面において生きてくるであろう。



写真⑧ヘリポート見学 写真⑨ケースカンファレンス 写真⑩グループで討議 写真⑪救急車の説明

一般社団法人福島県医療福祉関連教育施設協議会として初の学生(多数の大学)を対象とした全国的にも珍しい研修会である。その内容は星総合病院のスタッフが立案・企画から手探り状態で始めた。筆者も含めた参加校の教員がそれぞれ専門的な意見を出し合い、全体のプログラムのアウトラインが創出された。筆者の役割はアクティブラーニング・グループワーク形式での交流を通じた親交と気づきによる学びであり、同時に共有による学びの実感をいかに学生が自ら体験できるかをファシリテーターとして具体化することであった。研修を終えた学生た



ちは多業種についての情報の交換・共有をただだけでなく、グループワークを通して深化する過程を実感しつつ学ぶとともに、研修後も交流を続けるだけの関係を構築している。これは、産学連携および大学間連携と捉えることもできる。同時に、他のスタッフとともにおこなった筆者のファシリテーションは上記のような成果を上げるための地域貢献と捉えることができるのではないだろうか。

## 5. おわりに

保育者養成校として本学科の地域連携に関して、学生の学びと地域貢献に着目して初めて共著という形でまとめることができた。執筆を契機として本学科の連携事業を改めて見直す、各方面において地域との連携が進められており、本学科が地域に大きく貢献していることが明らかとなった。また、地域連携事業に参加した学生は、通常の授業では得ることの出来ない貴重な経験を積むことで精神的に大きく成長し、連携事業が学生の学びに繋がっていることも分かった。一方、今回の報告の中で連携事業においていくつかの課題も挙げられた。それらの課題は紙幅の関係でここでは触れないことにするが、各方面との協議を重ねつつ課題を克服することで、更なる本学科の発展に寄与するものと思われる。

次に、保育者養成校としての将来の展望を考えてみたい。周知のとおり、すでに次期学習指導要領の改訂作業は2018年度の全面実施を目標に始まっている。2016年8月には、中央教育審議会教育課程部会の幼児教育部会より審議の取りまとめ<sup>(7)</sup>が報告された。この報告では、現在の幼児教育が抱える課題の一つとして、「社会状況の変化等による幼児の生活体験の不足等から、基本的な技能等が身に付いていないこと」が挙げられている。わが国では人口の減少及び核家族化が進行し、幼児の生活体験はますます減少することが予想される。一方、忍耐力や自己制御、自尊心といった社会情動的スキルや非認知能力といったものを幼児期に身に付けさせることが、大人になってからの生活に大きな差を生じさせるという国際的な研究成果<sup>(8)</sup>等もある。近年、幼児教育の重要性への認識が益々高まっている中で、保育者養成校にはどのような保育者の育成が望まれるのであろうか。その鍵を握っているものの一つが次期幼稚園教育要領であろう。前述の教育課程部会幼児教育部会の審議の取りまとめでは、幼児教育において育みたい3つの柱となる資質・能力を次のように整理している。

- ①知識・技能の基礎 (遊びや生活の中で、豊かな体験を通じて、何を感じたり、何に気付いたり、何が分かったり、何ができるようになるのか)
- ②思考力・判断力・表現力等の基礎 (遊びや生活の中で、気付いたこと、できるようになったことなども使いながら、どう考えたり、試したり、工夫したり、表現したりするか)
- ③学びに向かう力・人間性等 (心情、意欲、態度が育つ中で、いかによりよい生活を営むか)

これらの資質・能力は、現行の幼稚園教育要領の5領域の枠組みで育んでいくことが可能である。しかし、個別に取り出して身につけさせるものではなく、遊びを通しての総合的な指導を行う中で「知識・技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力・人間性等」を一体的に育むことが重要である。それゆえ、保育者養成校は、学生が将来保育者として保育現場に立った際に、これらの3つの柱となる資質・能力を子どもに育めることのできる保育者の養成を目指さなければいけない。いずれにしろ、本学科は地域連携事業をこれまで同様に推進しつつも、次期幼稚園教育要領改訂を見据え、学生の2年間の学びについて見直しを図ることが急務であろう。

### 執筆分担

柴田：2, 44)②, 44)③

伊藤：44)①, 45)①, 5

早川：42)①

古川：41)②, 46)①

猪股：41)①

仲西：3, 43)①

三瓶：1, 43)②

### 引用・参考

- 1) 大場牧夫：表現原論—幼児の「あらわし」と領域「表現」—，萌文書林，1996.
- 2) 指田利和：こども教育宝仙大学と東京都中野区との地域連携について—保育者養成・子育て支援・地域社会—，こども教育宝仙大学紀要，第3巻，117頁-121頁，2012.
- 3) 新實広記：保育者養成課程における地域連携を活用した造形表現科目の授業改善—保育実践力の育成を目指した取り組み—，愛知東邦大学東邦学誌，第43巻，121頁-130頁，2014.
- 4) 柏原栄子：「遊び力」を育成する地域貢献型保育者養成教育の実践（1）～実践を支える「遊び力」の理論的構造化にむけて～，大阪人間科学大学紀要，第14巻，75頁-85頁，2015.
- 5) 福島県保育者養成校連絡会：保育実習の手引き，福島県保育者養成校連絡会，2016.
- 6) 幼児期運動指針策定委員会：幼児期運動指針ガイドブック，P10，文部科学省，2013
- 7) 文部科学省中央教育審議会教育課程部会幼児教育部会，「幼児教育部会における審議の取りまとめについて（報告）」，平成28年8月26日発表，  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/sonota/1377007.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/sonota/1377007.htm)（アクセス2016.9.23）
- 8) 例えば、ペリー就学前計画（1960年代のアメリカ・ミシガン州において、低所得層アフリカ系アメリカ人3歳児で、学校教育上の「リスクが高い」と判定された子どもを対象に、一部に質の高い幼児教育を提供し、その後約40年にわたり追跡調査を実施しているもの）などが挙げられる。